大宮まちまち新聞

Vol.024
2025年9月1日発行
OMIYA LIBRARY

Mini Theater OttO - 図書館のご近所さん -

今回のご近所さんは、大宮駅西口に2025年4月にオープンしたミニシアター「OttO」。カフェとシェアハウスを併設した新しい形の映画施設のオーナー今井健太（いまいけんた）さんに、お話を伺いました。

オーナー：今井健太さん

―映画館とカフェ、シェアハウスという珍しい組み合わせですが、どのような経緯で建てられたのですか？

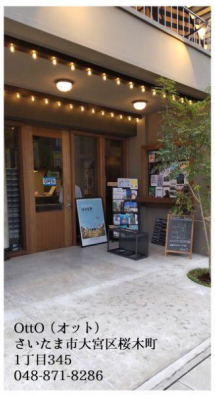
ここは、大宮市の時代から三十年以上行われている区画整理事業の一番終わりの場所なんです。当初は普通の賃貸住宅を建てる計画だったんですけど、義理の父に「次の世代の人たちが管理して使うものだから、何かできないかね」と相談されて……。もうちょっと意味のあることをした方がいいんじゃないかと思い始めたんです。

区画整理をすると、街は新しくなるんですけど、昔から住んでいた人と新しく引っ越してきた人との接点がなくなっちゃう。そんな中で何が必要かなと考えた時、映画館はどうかな、とふと思ったんです。

映画って、文学があって音楽があって、絵、写真みたいなものが全部混ざっていて、その中に人生とか歴史とか、学びとか娯楽とか、あらゆるものが詰まっている。そういうものが街にあって新陳代謝を起こしたら、街にとってもいいだろうと。人や作品が入れ替わり、色んなことが起きることで、建物自体も価値を失わずにいられるんじゃないかなと思ったんです。

僕は映画館の専門ではないので、業界の知り合いも全くいなかったんです。そこで色々と調べてみたら、「深谷シネマ」の竹石さんという館長さん（当時）が、さいたま市にNPOを作って上映活動をしていることを知って、会いに行ったんです。名誉館長（当時）が大林宣彦監督だったんですが、お二人とも「ひとつの街にひとつの映画館、それが街にとっていいことだ」と信じている人たちなんです。だから「大宮で映画館を」と言ったら、「いつかそんな人がくるんじゃないかと思っていました」と泣いて喜んでくれました。

また、この話をあちこちの企業や配給会社へ持っていったら、その中から「面白いね」と協力してくれる方が現れて色んな繋がりができた。たまたま集まってくれた人たちが、ここを成り立たせるのに必要な人たちだったということは非常に奇跡的だなと思います。


OttO（オット）
さいたま市大宮区桜木町
1丁目345
048-871-8286

―「OttO」の名前の由来は？

僕は家でおっ父と呼ばれているんですが、店の名前をどうしようかねと子どもに聞いたら、「おっ父の映画館だからオットゥじゃない？」と言われたんです。ロゴにもしやすいし、イタリア語で8（オット）という意味だし、横にすれば無限大、漢字の八なら末広がりにもなって縁起がいいな～と。

語源を調べたら、古代ゲルマン語に「相続財産」という意味もあったんですよね。

―映画館とシェアハウスのご紹介をお願いします

映画館には防音の部屋があって、小さいお子さん連れの家族や、様々な事情で個室で観たい方などが実際に使っています。

東京に「シネマ・チュプキ・タバタ」という、日本で唯一のユニバーサルシアターがあるんですが、そこではすべての作品に音声ガイドと日本語字幕がついていて、目が見えない人も耳が聴こえない人も同じ作品を楽しむことができるんです。それに感銘を受けて、OttOもできる限りのことをしたいなと思ったんです。

シェアハウスは二十五室あるんですが、年配の方からも問い合わせがあります。今はシニア世代の単身者が多いので、今後はみんなが協力して暮らしていくことが重要になってくるんじゃないかと思っています。昔の長屋みたいにね。

音響に拘ったシアタールーム。50席の観客席があり、最前列にはふたり掛けのソファクッション席（4組8名）も。映画の上映以外にも、音楽ライブや地域と協力したイベントも行っています。

写真提供：佐々木善樹建築研究室

―実際にスタートしていかがですか？

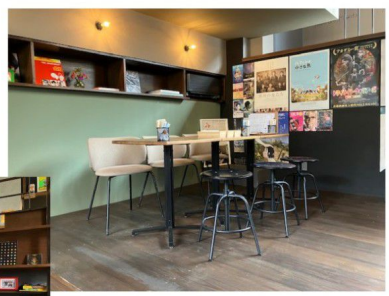
めちゃくちゃ大変です（笑）。ここの設備工事は僕が全部担当して、さらに竣工から一カ月でオープンしたので大変ですけれど、カフェで子どもが宿題をしている隣でお母さんがピザを食べていたり、高校生がスタッフと恋愛話をして帰ったりする姿を見ると、あ～よかったなと思いますね。

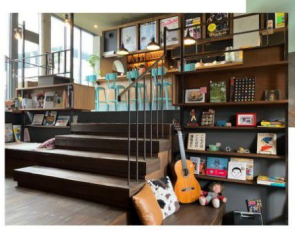
―今後はどんな場所にしていきたいですか？

可能性はいっぱいあると思います。それを、いかに地に足をつけた形にするかが大きな課題です。映画館の休館日が週2回あるので、その日を開放することも考えています。すでに地域の人から、DVD鑑賞会をしたいとか、落語をやりたいという話もきています。

場所は集まってくる人で作られるものだと思っているので、今後どうなっていくのか僕自身もわからないです。変に僕がこういう方向に、と決めてしまうと僕の価値観の範疇になってしまうので、その外側にあるものを楽しみにしています。

すぐ近くに庚申神社があるんですが、夜中も灯りがついていて誰でも入れる。それだけでほっとする。OttOもそんな存在になりたいと思います。




カフェスペースには映画のポスターやスタッフが持ち寄った本、雑貨がずらり。
コーヒーや焼きたての本格ピザの他、夜はお酒も楽しめます。

今井さんのおすすめ本

『かもめのジョナサン』
リチャード・バック／著
五木寛之／創訳
ラッセル・マンソン／写真
2014年　新潮社

速く飛ぶことが生きがいのかもめのジョナサン。他のかもめは食べること、群れることが生きていることだと思い込んでいる。ジョナサンには他のかもめが怠惰に見える。

彼自身は翼でどれだけ飛べるか、ということのためだけに生きているというお話で、生きることと生活することの違いを考えさせてくれます。

『スローターハウス5』
カート・ヴォネガット・ジュニア／著
伊藤典夫／訳
1978年　早川書房

仏教的な話で、人生の中にはとんでもない苦難があるけど、まあこんなもんだよという一文がいつもついてくる。良いも悪いも自分が決めることで、それを自分がどう捉えるかで、世界の見え方が変わっちゃう……そういうことを何となく感じさせる本です。

『病気になったパーテンダーの罪ほろぼしレシピ』
藤村公洋／著
2012年　講談社

OttOのカフェの厨房にいるスタッフが以前、病気になったときに、生活習慣を変えようと毎日料理を作ってSNSへ投稿していたら、出版社の人が来て「本、出しませんか？」って。それで出来た本です。

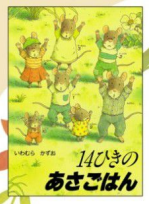
わたしのすきなえほん

わたしのすきな絵本は『14ひきのあさごはん』です。誰もが知っているロングセラー本。14ひきシリーズの中でも、一番のお気に入りの絵本です。

物語は、14ひきのねずみ一家の朝の生活から始まります。朝起きて顔を洗って、14ひきみんなであさごはんのしたくをする…何気ない朝の生活を描いた作品です。

この絵本を初めて読んだのは幼少期のころでした。家族みんなであさごはんを準備する様子に、「楽しそう！」「あさごはん作り大変そうだなぁ」と幼心に思ったことを覚えています。また絵本いっぱいに広がった大自然のイラストに驚き、繊細に描かれた虫のイラストに「本物みたい…怖くてページをめくれない。でも続きを読みたい……」と葛藤しながら読んでいました。

大人になった今、子供と一緒に読んだところ「みんながんばれー！」「あさごはんができたから、みんなたべよー！　いただきます！」と夢中になっていました。イラストを見て考えて、絵本の世界にしっかり入りこんでいる様子になんだか微笑ましくなりました。何年経っても繰り返し読みたくなり、季節の移り変わりも楽しむことができる絵本です。



紹介した本
『14ひきのあさごはん』
いわむらかずお／作
1983年　童心社

おおみや読書バトン

19回【落ち葉】

前回からバトンを引き継ぎ、今回のテーマは「落ち葉」です。

落ち葉といえば紅葉、紅葉といえば秋、秋といえば私が一番好きな季節……。原稿を書いている今は夏の暑さに負けてしまいそうですが、秋に思いを馳せながら『ポプラの秋』をご紹介したいと思います。

父を亡くした7歳の女の子が母と引っ越すことになった「ポプラ荘」。その名の通り大きな金色に輝くポプラの木が目を引く小さなアパートで、少し不気味で近寄り難い大家のおばあさんと出会います。そして、そんなおばあさんが女の子に教えてくれた秘密とは……。小さいながらもたくさんの不安を抱えて葛藤する女の子と隣人たちとの温かくて優しい物語です。

秋を連想するような背景描写が多々ありますが、私はポプラの木の下で落ち葉を集めてみんなで集まって焼き芋を食べるシーンがお気に入りです。今年は秋を長く楽しめますように！

そして次回のテーマは、【秘密】でお願いいたします。

紹介した本
『ポプラの秋』
湯本香樹実／著
1997年　新潮社（新潮文庫）

紹介者　なまけもの

キャラもえ

困った。すごく好きなキャラクターはいるにはいるが、広く浅くを実践している私はまゆっこ新聞の記事にできるほどの、読書につながるような推しはいない。

それでも書かなければならないなら東京都の北区に住む名探偵にしようと思う。

探偵というものは各地で事件に巻き込まれるが、浅見光彦も雑誌『旅と歴史』の記事を書くために全国津々浦々に足を運び、事件に首を突っ込んだり巻き込まれたりする。

事件が起きた際に、現場の状況から警察が自殺だと判断したことに対し、偶然居合わせた光彦は「そうでしょうか」と疑問を口にする。シリーズお決まりのやりとりなので、読者は「そうそうこの展開」とわかっているが、自分の判断にケチをつけられた警察は光彦に身元を問う。光彦はフリーのルポライターをしていると正直に答えるのだが、死体がある現場に、ぽっと出てきた正体不明のルポライターは不審人物として扱われ、身元確認もさぞかし難航するかと思いきや、実は彼の兄さんは……。ここは原作を読むかドラマを見てほしいのだが、兄のおかげで身元が保証され名探偵という事実も発覚し、警察からの信頼がMAXになり、捜査協力を頼まれるのだ。

職業で不審人物とみなし、失礼な態度を取る警察はどうかと思うが、きちんと謝罪されれば、その謝罪を受け入れる光彦はすごい人であり、尾をひかないのが大変好印象なのである。しかも「兄は兄、僕は僕」と立派な兄を持ちながらも、その権力でどうこうする感じがないのも好きなポイントだ。（兄のおかげで捜査情報が手に入っているという面はあるが）。

顔見知りになった警察が出てくる話では、このお決まりのシーンはなくなり、すんなり事件が始まるようになるが、やはりファンとしてはさみしいものである。

ドラマから見始めたので、私の浅見光彦のイメージは俳優の沢村一樹さんになるのだが、探偵にありがちな神経質さや、傲慢さがないすらっとした青年名探偵を演じる姿は、とてつもなく好ましいのである。

ちなみに、作中に出てくる平塚亭の団子を買いたいと高校生の頃に王子へ行ったが、調べが足りず休みだった。食べるまであきらめない私は、その後、勤務地が北区になったことでチャンスが増え、お団子を買うことに成功している。

内田先生の他の作品にも登場する平塚亭。興味のある方は桜の時期、お団子を食べに飛鳥山経由で行くことをお勧めする。

紹介した本
『浅見光彦シリーズ』
内田康夫／著
角川書店（角川文庫）

名言

――話のなかには多少なりとも真実が、ほんとうのことがなくてはならない

「むかしむかし、大きな森に、貧しい木こりの夫婦が住んでいた」という出だしで始まる『神さまの貨物』。まるで童話のように語られますが、実際の内容は、神さまからの贈り物である赤ちゃんが、大人たちの勇気と犠牲によってホロコーストを生き延びる残酷で悲しいお話です。

１９４３年３月、第４９団貨物列車はユダヤ人たちを載せて収容所へ向かっていました。この列車に乗っていたとある父親は、せめて子供だけは助けようと我が子を列車から投げ捨てます。偶然その赤ちゃんを受け取った木こりのおかみさんは、列車の神様が授けてくれた赤ちゃんとして大切に育てることにしました。

家族から批判されようとも、愛情をもって赤ちゃんを育てるおかみさん。実の子を捨ててしまったことを後悔しながら生き延びる父親。他にも胸を打たれるシーンがたくさんあり、涙なしには読めません。

ところが、エピローグで作者は「これはほんとうにあった話かって？いやぜんぜん」と書きます。「いやぜんぜん」に驚いた私は、この後に語られる言葉にはっとしました。

「ただ一つほんとうだったこと、ほんとうにほんとうのこと、この話のなかでほんとうに語る価値のあること――というのも、話のなかには多少なりとも真実が、ほんとうのことがなくてはならないからで、そうでなければなぜ苦労して語る必要があるだろう――」

ほんとうにあった話であろうとも、そうではなくとも、「ほんとうにほんとうのこと」が物語の中にはある。だからこそ心が揺さぶられるのだ、と私に教えてくれる名言です。

紹介した本
『神さまの貨物』
ジャン＝クロード・グランベール／著
河野万里子／訳
2020年　ポプラ社

祝！来館者500万人

令和元年５月７日の移転オープン以来、大宮図書館は多くの方にご利用いただき、おかげさまで６年４カ月目の令和７年８月１日に入館者が５００万人を突破しました。

記念すべき５００万人目の来館者の方に、お話を伺いました。

どちらからいらっしゃいましたか？
→さいたま市です。

図書館にはよくいらっしゃいますか？
→よく来ます。

大宮図書館の好きな所は？
→今日も利用しましたが、「わたしの自由時間」という託児サービスがあるところがいいです。私もゆっくり本を読みつつ、子どもも遊んでもらえるのでありがたいです。

大宮の好きなところは？
→最近引っ越してきたばかりですけど、子どもが一目見てヌゥのことが大好きになって。ヌゥと会えるイベントにはよく参加しています。

好きな本はありますか？
→『こんとあき』が好きです。

来館者５００万人目としての感想をお願いします！
→とてもうれしいです。図書館も開放感に溢れていて、子ども用のコーナーも広々していて使いやすいので、今後も利用していきたいと思っています。

ありがとうございました！
これからも大宮図書館をよろしくお願いします！

大宮100景 中山道 塩地蔵尊

むかし、妻に先立たれた浪人が二人の娘を連れて旅をしていたところ、大宮宿で病に倒れました。病は日一日と重くなっていきます。

嘆く娘たちの夢枕に、ある晩、地蔵様が現われ、塩断ちをするように告げて消えました。娘は早速塩断ちをし、近くの地蔵堂に祈ったところ父の病が全快しました。

そこでたくさんの塩と線香をこの地蔵様に奉納し、幸せに暮らしたとのことです。

参考資料：
『大宮の郷土史　第8号』
1983年　大宮郷土史研究会
『大宮のまつり（おおみや双書2）』
1999年　大宮市教育委員会

大宮図書館
ホームページ

大宮図書館
X

Xではイベントやスタディコーナーの待ち人数など大宮図書館の情報を日々お伝えしています。ぜひ、フォローしてみてくださいね！

この刊行物の書影画像はBOOKデータASPから引用しています。